たりと丹精をして、どうにかおぢばに帰って頂き、別席を運んで頂けるよう、勤めて頂きたいと思うのであります。

そうはいっても、おぢば帰りや別席をお誘いする時に、どうお話して良いのか分からない方もおられると思います。そこで今回の巡教では、その動きの参考にして頂きたく、「おぢばがえりのすすめ」「別席のすすめ」というものを作らせて頂き、参拝者一人ひとりにお渡ししております。巡教を受けられなかった方は、会長さんから貰って頂き、是非参考にして頂きたいと思います。その資料の中に、ようぼくとは、「たすかりたい」という思いから、「たすかってもらいたい」という心に変わる事が、ようぼくになる事と書かれております。

私は昨年、一期講師の御命を頂き、女子クラスを受け持たせて頂きました。生徒は全員で15名でした。下は18歳から、上は70歳で、見た目はみんな元気そうでしたので、最初は安心していたのですが、話を聞いていくと、現在乳癌で治療の前に修養科に入った方や、子供が末期癌の方、旦那と離婚調停中で3人の子供を連れてきた24歳の女性、特に多かったのはうつ病の方で、5人いました。今も治療中の方や、今は治っていても、いつ再発するか不安な人など、15人全員が大きな事情・身上を抱えて修養科に来ていて、どうにか助かろうと一生懸命でした。

それが1ヵ月過ぎると、慣れない修養科生活の中で、自分の事だけで精一杯のはずが、自分の事情・身上をさしおいて、周りの身上の人におさづけを取り次ぎ、事情の人のお願い勤めを一生懸命している姿を見て、この人たちはこの修養科で、本当のようぼくになったんだな、と思いました。又、今更ながらに、おぢばは凄い所なんだなと、改めて感じました。

今も生徒からよく連絡が来るのですが、ある生徒が地元に帰って、こんな事を言っていました。修養科に入る前は全然気が付かなかったのに、帰るとこんなに自分の周りに悩んでいる人がいる、という事に気が付いたそうです。

この中にもようぼくの方がおられると思いますが、日々通っている生活の中で、ようぼくの心「たすかってもらいたい」という心を忘れてはいないか、今一度再確認し、その心で周りを見てみて下さい。きっと悩んでいる方、助けてほしい方がいるはずです。どうかその方に、思い切っておぢばがえり、そして別席を運んで頂けるよう、お誘い下さい。

教祖100年祭の時と、今現在の違いの二つ目、それは、この道を信じる心の強さです。きっと当時の方々は、親神様の御守護を信じ、教祖は御存命で願えば必ず助けて下さる。だからこの教えを信じて通れば必ず幸せになれるんだと、信じきる心が、今より強かったのではないかと感じます。

人は目に見えるものしか信じにくいものですが、この空気も目には見えなくても、その存在を否定する人はいません。修養科生も毎朝本部の朝づとめ前に、教祖殿で教祖に朝の御挨拶をされている方が多くいましたが、その方々は3ヵ月間で、教祖をより身近に感じている様に見えました。

私も一期講師の時に、現在天理高校の二部に通わせて頂いている二男が、こんな話を聞かせてくれました。

天理高校の二部では、数ヵ月に1回「お仕込みの時間」というのがあって、色々な体験をした方が、直接お話ししてくれる時間で、その時は海外の南米に布教に出られた青年の話でした。その青年は高校生の時に、脳に腫瘍ができて苦しんでいました。その時、親友が自分の事のように、一心不乱で神様にお願いしてくれ、そのお陰もあり、不思議な御守護を頂きました。しかし、数年後、その親友が、突然の事故で出直してしまったのです。

自分の恩人でもある、大切な親友を失い、彼は生きる気力も無くなり、途方に暮れている時、ある先輩に海外布教を薦められ、決死の思いで南米の布教を決めました。そして、その南米に行く飛行機のチケットを、その先輩のアドバイスで、2枚買ったそうです。1枚は自分の分、そしてもう1枚は教祖の分として買い、南米布教に出たそうです。

でも現地ではなかなか上手く行かず、勇めなくなると、よく近くの公園で12下りのてをどりをしていたのですが、日を追うごとに勇めなくなる日が増え、公園でのてをどりをする時間が多くなりました。その日も近くの公園で、てをどりをしていたそうです。

すると一人の女性が近づいてきて「1つお聞きしても良いですか」と、話かけて来ました。彼女は、「あなたはいつもここで踊りを踊っていますが何の踊りですか」と尋ねてきたそうです。彼はこれは神様の話が出来ると、一生懸命親神様・教祖のお話をし、その女性も最後まで聞いてくれました。その後、彼女は「もう1つ聞いても良いですか」と言いました。すると、その女性は「あなたが踊っている時、いつも後ろのベンチに座って、あなたを見ている、赤い服を着た女性はどなたですか」と聞かれました。それを聞いた彼は涙が溢れ出て、それ以上話をする事が出来なかったそうです。その翌日から、彼は自分は一人ではない、